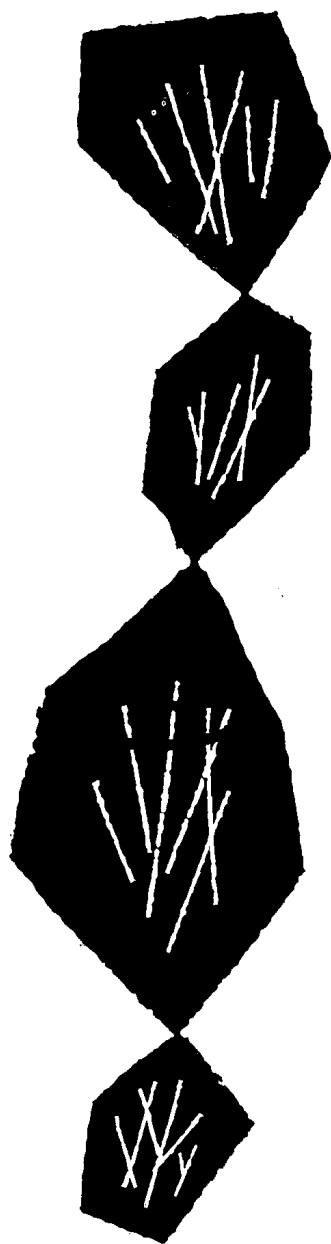


子どもの詩の教室

味わいかたと書きかた

滑川道夫

あすなろ書房



著者紹介

滑川道夫 (なめかわ・みちお)

1906年秋田県湯沢に生まれる。秋田師範(大15) 同専攻科(昭4)
日本大学(昭13)卒。秋田師範付属小学校訓導, 私立成蹊小学
校・中学校・高校教諭, 同小学校主事, 成蹊学園教育研究所長
を経て現在東京教育大学・東京女子大学講師。教育評論家。日
本児童文学々会理事・日本児童文学者協会理事・日本作文の会
委員等。

著書—文学形象の綴方教育・作文教育・児童文化論・子どもの
詩等。

現住所—東京都武蔵野市吉祥寺北町1丁目7〜15

子どもの詩の教室

昭和40年12月8日発行

定価 680円

著者 滑川道夫

発行者 山浦常克

印刷者 植村喜一

発行所 株式会社 あすなろ書房

東京都千代田区九段 4〜1 斉藤ビル

電話 (281) 0348 振替東京 63084

印刷・第一印刷KK



はじめのことば

これを読んでくださるあなたと、いっしょに考えながら、「子どもの詩」についての、話を進めていきたいと思います。やさしいことばで詩の心を考えてみましょう。

できるだけ、じっさいの作品を例にひきながら、子どもの詩の味わいかたや書きかたについて話を進めていきたいと思っています。わたしがむかし書いた「こどもの詩」(牧書店刊)のつづきのつもりで話をしてみましよう。

どうか、あなたも、考えながら読んでみてください。そして、もし、じぶんにも書けそうだ、書いてみたいという時は、わすれないうちに、ノートに書きとめておくようにしましょう。



詩の話の聞いたり、読んだりして、ただ「わかった」だけでは、ほんとうに「わかった」ことにはならないと思います。じぶんで書いてみて、はじめてほんとうの「わかった」という思いがでてくるものだと思います。「つくりだす」ことの中で「わかる」こともふかくなつて進みます。

読むだけでなく書いてみるのです。そしてまた読んでみると、ほんとうにわかるのです。「子どもの詩」は、だれにもわかり、だれにも書けるものだと、わたしは信じています。書いていくうちに、おもしろさがわかり、たのしさがあらわれてくるのです。

この本の中にある作品の中から、すきな詩を見つけてください。きつとすきな詩が見つかるだろうと思います。

じぶんのすきな詩をもつことが、まず、だいじなことです。

それにつけても、これから、わたしは、あなたが、きつと書いてみたくなるように、この話をつづけていきたいと願っています。

えらそうなことをいって、はたしてどんなものがでけるでしょう。書き手のわたしもそれをたのしみにしています。読み手のあなたもたのしみに読んでくださると、うれしいと思います。

もくじ

はじめのことば

生活の花

純子ちゃんの詩

書きたくなる心

よびかけたい心を

心のうごきを

ことばをよぶ心のうごき

詩の生まれる心のうごき

じぶんの感動とことば

感動のあらわれることば

ながい詩 みじかい詩

みじかい詩もある

ながい詩

.....セ

.....三

.....六

.....

.....三

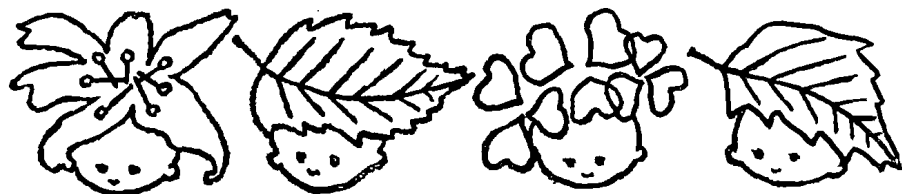
.....五

.....七

.....

.....三

.....三



ことがらを中心へのべた詩

ことがらの中の感動 五三

「こと」と「ところ」のむすびつき 五五

書かないでいられない心 六一

見つけて書くこと

生活を見つめる 六六

心のうごきを見つめる 七〇

心にうかんだもの 七五

すなおなおどろき

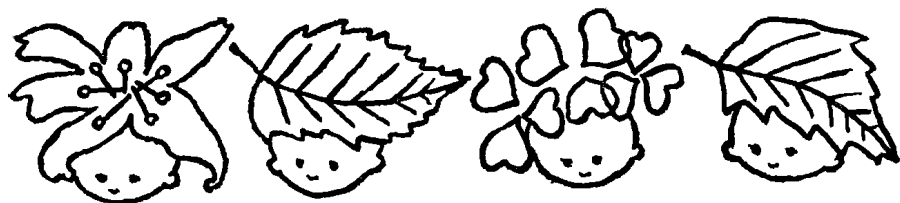
白秋の童謡 七九

白秋の児童詩の考え 八三

なんのために詩を書くのか 八九

たとえていう

「ような」「ように」「ようだ」 九二



感じをごまかしてはいけない 一五

もう一度考えてみる 一〇〇

考えをのべる詩

じぶんで考えたことを 一〇七

きたないもののうつくしさ 一二三

じぶんの感じをたいせつに

感じをあらわすことば 一二〇

感じをあらわすくふう 一二六

見えない世界の詩

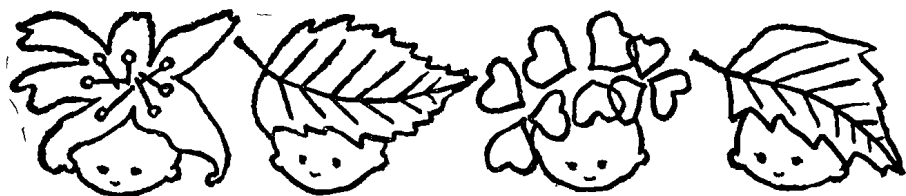
自由な想像から生まれる詩 一二四

見えないなまの詩 一二七

じぶんの願い 一三三

むだなことばとだいじなことば

ことばのむだ使い 一五〇



けずられないことば 一五

なにがだいじなことば 一五

中心になることば 一五

あなたの感じ わたしの感じ

じぶんの感じをいつわらずに 一五

あなたの感じとぼくの感じと 一六

ことばでたしかめる 一七

いちばん書きたいものを

ほんとうの感じをじぶんのことばで 一六

うつくしいものを 一八

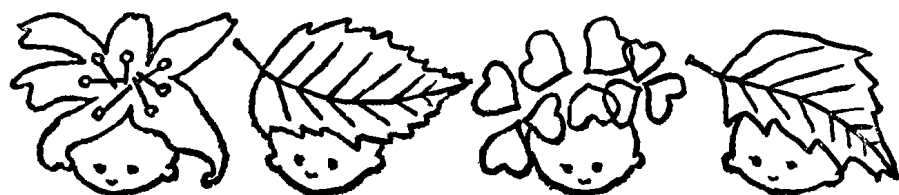
はっと思う心のうごきを

「よびかけ」と「おどろき」 一九

聞いてもわかる詩を 一七

ことばでつくりだすしごと 二〇

あとがき 二〇



生活の花

胸にひびくことはをだいに
心の底のことばのちからを

純子ちゃんの詩

わたしのすきな「子どもの詩」から話をはじめましょうか。

すきな「子どもの詩」はたくさんありますが、つぎの純子ちゃんの詩も、そのひとつです。

純子ちゃんが小学校三年生の時、母の日におかあさんにあげる詩を書きました。五月の第二ばんめの日曜日が「母の日」ですね。カーネーションを胸につけ、「おかあさん、ありがとう」といって、プレゼントをあげたりして、おかあさんに感謝の心をあらわしましょうというのが「母の日」です。

純子ちゃんは、おかあさんに詩を書いてプレゼントしました。

おかあさんに ^例1V

「おかあちゃん、いくつになった。」ときいたら、



「もう、おばあさんや」と わらいながら

った。

そんなことない。

おかあちゃんは まだ わかい。

ようふくも にあうし、

パーマも あてるし、

おかしも つくるし、

おりょうりも つくるし、

まだ わかい。

こないだ、わたしが「こがね虫」をうたった

まだ わかいやろうと思う。

△京都府八木小・三年・八木純子・詩集「八木の子ども」第1号V一九六一

純子ちゃんがおかあさんにあげたこの詩は、どんな高価な品ものよりも、すばらしいプレゼントであつたように思います。ダイヤの指輪よりも、おかあさんがよろこんだのではないでしょうか。カーネーションの花より美しい「心の花たば」ですね。

純子ちゃんは、心の底から「うちのおかあさんは、まだわかい。」といいつづけています。

おかあさんは、まだおばあちゃんではありませんということを、パーマもあてるし、ハーモニカもふいてくれるし……というじっさいの例をあげて、「まだ わかい」ことをはつきりさせていき

ます。「まだ わかい」をくりかえして、おかあさんになっとくさせようとしています。そこに、純子ちゃんの願いがあらわれています。「おかあさん、いつまでもわかく元気でいてくださいね。」という願いが、ひしひしとわたしの胸にせまってきます。

この純子ちゃんが、それから一年たって、四年生の時の「母の日」に、つぎのような詩を書いて
います。

母 の 日 に △例2V

おかあちゃん、

また 母の日がきたなあ。

おぼえているか おかあちゃん。

わたしが まだ小さかった時

赤いやけてるようなお日さんが

チカチカする夕ぐれに

おかあちゃんにおんぶしてもらって

カラスの帰っていくのを見たなあ。

その時 おかあちゃんは

「先にとんでいくのが おかあさんカラス

あとからとんでいくのが 子どものカラス」

と 教えてくれた。

カラスも やっぱりおかあさんがすきなん

や。

わたしも やっぱりおかあさんがすきなん

や。

「きょうは母の日（ママの日）から

ろうかを おんぶして 歩いてあげたいな

あ。」

そしたら おかあちゃん、

「純子が おかあちゃんをおんぶして

歩けるほど つよくなった

うれしいわあ。」

と いったたなあ。

らい年の 母の日には

三べんぐらい おうふくした^{つと}げる。

△前同校・四年・八木純子・詩集「八木の子ども」第1号V一九六二

「来年の母の日には 三べんぐらい ローカを往復してあげるよ、おかあさん」という純子ちゃん
の心があなたの胸にひびいていくでしょう。「純子がおかあちゃんをおんぶして歩けるほどつよ
くなった。うれしいわあ。」というおかあさんのよろこびと、純子ちゃんがおかあさんをよろこばし
てあげたい心がよくあらわれているところがすきです。

純子ちゃんが「母の日」について書いた生活の歌です。純子ちゃんの生活にさいた花のような詩
です。

この詩ののっている小さな詩集「八木の子ども」（第1号）を、旅さきの九州の熊本で、校長先
生（佐古田好一）からいただきました。子どもの詩のすきな佐古田先生は、詩集のあとがきの中
で、こういっています。

「詩は、くらしの中の『花』のようなものです。それは、美しいからというだけではありませ
ん。いねの花やたんばぐりの花のように、めだたない花も、実をむすびますね。詩もまた、くら
しの中で、いろんな実をむすぶ花なのです。

じっくり見つめる目、すなおに感じる心、深く考えるあたま、そして、ものごとや考えや感じ
をびったりいいあらわすことば。詩は、そういうものをゆたかにみらせてくれます。」

ほんとうにそうです。いろんな実をむすぶ生活の花が「子どもの詩」です。

佐古田校長先生とふたりで観光バスにゆられながら、純子ちゃんの話を知ったり、「子どもの詩」を話しあったりしました。その時、すなおに育っている純子ちゃんの「母の日」の詩をきっかけにして、わたしの詩の話を進めようと思ったのです。

純子ちゃんの「生活の花」ばかりでなく、全国のともだちが生活の中から生みだした「子どもの詩」を味わいながら、詩はどこから生まれてくるのかを考えてみましょう。どうしたらいい詩が書けるようになるのかを考えてみましょう。

さあ、それではつぎのページをひらいてください。

書きたくなる心

よびかけた心から
心の動きを思いだして

よびかけた心



「おかあさん！ おなかすいたっ、なにかちょうだい！」
学校からかえると、すぐおかあさんにオヤツをねだったことがあるでしょう。これがおかあさんへの「よびかけ」のことばです。

「おかあさん、みて、みて、ほら、はまちゃんの家の屋根、おおきなお月さんでしょう。」

これも、おかあさんによびかけています。

「せんせい！ オシッコ。」

これも、せんせいによびかけているのです。

「五郎くん、ケシゴムかしてよね。」

「ゆきちゃん！ まってね。」

これもそうです。

「五郎くん！」「五ちゃん！」「ゴロすけ！」

「ゆき子さん！」と、よんでも「よびかけ」です。

なぜ、わたしは「よびかけ」をここにとりだしたのでしょうか。それと「詩」とどんなつながりがあるのでしょうか。

ただ、あいてによびかけたことばだけでは、詩になりませんね。「おかあさん！」「せんせい！」となんべんよんでみても、なんべん書いても詩にはなりませんね。

よびかけに、つづくことばが問題です。よびかける時には、なにかわけがあるのです。その人に「たのみたい」「知らせてあげたい」「じぶんの考えを聞いてもらいたい」「じぶんで感じたことを、あいての人にもおなじようにわかってもらいたい」といったなかみのあることばがつづくはず。よびかけたい心とその動きがだいじなのです。

時には「よびかけ」ないではいられないという心のうごく場あいもあるでしょう。そこにだれもいなくても、どうしても、だれかによびかけたいと思う時もあるでしょう。ひとりごとでその人に「よびかけ」る時もありましょう。時には、イヌやネコのような動物や、草や花や、山や月にも「よびかけ」、いのちのない「もの」にさえ、生きているもののようによびかけずにはいられない時もあります。

むかしの歌や、俳句や詩にたくさんそういう例があります。

よびかけずにはいられない時というのはどんな時でしょうか。さまざまな場あいがありますが、まずつぎの例を読んでみましょう。

も も △例3V

はやくかえって ももくうべ

せんせい、もう いいね。

ぎょうぎよくしますから

やりなおし しないでね。

せんせい、さようなら。

ああ はやくかえって

ももの木に のぼって

もも くうべ。

△福島県田口小・一年・たかくかずおV―日本児童詩年鑑一九六〇年版より―

この一年生は、はやく家にかえってうらのモモの木にのぼって、モモをとる。あの白い毛のようなものを、ズボンにごしごしこすって、がぶりとやる。歯のカタがつく、あまい汁がのどをぐぐつとおる、ああ、はやく家にかえってモモをたべたいと、いっしんに思っているのです。「先生、さようなら」とあいさつをして、はやくかえりたいのです。

いつものように「その列によそ見をしている人がいますね。もういちど、やりなおし！」とやら